

恋歌

孤独なバカ

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

「今度会えたら、シズちゃんがよければ付き合ってほしい」  
ずっと女子っぽいと呼ばれていた少年がいた

歌が昔から好きで隙間を見ては歌ってばかりいた少年  
だけでもクラスからは人気で、いつも笑顔でそして人を巻き込んで  
いった少年がとある少女に約束したに別れの際に伝えた言葉だった  
そして10年近くの日々を過ごした少年と少女は各分野で有名と  
なったが未だにその初恋は続いたままであった  
ずっとお互いにその初恋に縛られたまま再開することに  
なる

歌手としての曲はHoneyHorksを採用していますが歌い  
手なので他の歌も登場します

目次

プロローグ

1

再会

5

## プロローグ

“初恋の思い出は？”

“えっと、小学生のころですかね。今でもはっきりと覚えているんです”

数ヶ月前に自分のインタビューが載った雑誌を見て俺は少しだけ苦笑してしまう

数週間前にインタビューされた記事。今日発売の音楽雑誌のインタビューだ

“女の子って小学生一二年の時同じクラスだったんですよ。可愛いつていうよりも綺麗って方がいいのか？小学生一二年でそういうタイプって珍しくて、その子いじめられてたんですよ。でも優しくて、可愛いもの好きで。お姫様に憧れていた人でしたね”

俺は少しだけ恥ずかりながら答えたことを覚えている

“その女の子とはどういう関係だったんですか？”

“俺にとつて初めての友達であり、：初恋の相手でもあったんですよ。でも俺って前にも話した通りに転勤が多くて。今の事務所に入るまではずっと一二年で転校ばかりしてたんです。だから小二の時に転校してしまっただけです。一応告白はされたのかな？元々恋人未満親友以上の関係で、いつも一緒にいましたし、お互いにカップルって言われてもお互いに否定しませんでしたから。だからお互いに別れ際に再会したら付き合おうって約束しました”

“あら。素敵ですね”

“そうですかね？今と違ったなら少し臭くて恥ずかしいですけど。でも：あれつきり恋つてことをしたことないんですよ。今になったら時効かもしれないですけど。約束を叶えないといけないうって思ってしまった”

実際あれつきり俺は誰かを好きになることはなかった

誰かを好きになるってことすらできなかったと答えた方がいい

今も時々その人の記事を見てしまう

剣道で全国大会で負けなしと言われている美少女の記事が時々出

るのだ

その記事を見るために剣道の雑誌を定期購読してたりするのだが

……

未練たらしいとは思うけど

それが俺、速水春樹のいまだに続いている初恋の思い出だ

春、出会いと別れの季節

「やっべえ。遅刻!!」

入学式の日俺は全力で走っていた

自分の雑誌を見て遅刻したとかなればシャレにならない

俺は全力ダツシユで高校へと向かう

桜並木の中で全力で走る俺は少しだけ情けなくなってしまう

まあ自業自得であるので仕方ないことだが

少し走っているとざわめきが聞こえてくる

「あつ。あの人って。御城春樹じゃない?」

「えっ?…本当?」

あつ。やばい。伊達メガネかけてくるの忘れてた

するとざわめきが聞こえてくるが俺は聞こえてないふりをしよう

と俺は走ろうとする

御城春樹とは俺の歌手としての歌い手としての名前であり、今は歌

手としても活動している

「すみません!」

「……はい」

すると一人の女性から話しかけられる

「あの、御城さんですよね?握手してもらってもいいですか?」

「はい。俺でよければ」

すると集まりだす人集りと歓声が聞こえてくる

俺は表には出さないが内心小さくため息を吐きながらサインや握

手をしていく

入学式から遅刻が確定した瞬間であった

「……本当にすいません!!」

「い、いや。さすがに有名人だから仕方ないとは思うけど……これから気をつけてね」

「うす」

俺は入学初日から先生の注意を受けた後俺はため息を吐く

御城春樹

中学生だったためテレビ出演はかなり控えているがオーディションに友達の勧めで出たところ最優秀賞を受賞した。今でも新曲を定期的に出演しておりオリコンベスト3常連。小学校六年の時にデビューし最初は歌い手として活動。最近では夏休みを使いライブを開くなど、歌い続けていく。春の新作はドラマの主題歌として歌っていることもありかなり認知は高い

「そうだ。白崎さん。この子同じクラスだから連れて行ってあげないかしら」

「はい?」

「ん?」

すると隣でどうやら入学式で隣の人とかかなり話していたのか叱られていた少女が俺の方を見る

「えっ!御城春樹!!」

「……やっぱりメガネ必要かあ。メガネあつたら隠せるのに」

「そうね。出来るだけ変装はしておいてくれるかしら」

「了解です。ついでに白崎。それ本名じゃないから。……一応自己紹介しとくけど速水春樹。歌い手として活動している」

「初めまして。白崎香織です」

……まあ覚えているわけないか

実は白崎とは小学一年のころ同じクラスだったんだけどな

「それじゃあ行くか。……初っ端遅刻とかマジでないんだけどなあ」  
「えつと?」

「春樹でいいぞ?俺名前はそのままだし」

「あの、後からサインもらっていいかな?」

「別にいいぞ」

と他愛のない話をしながら教室に向かう

そして入学式が終わりホームルームが始まっているのだろう教室に入る

「すみません。遅刻してきました」

「ま、マジ？」

「ほ、本物？」

俺が入った瞬間その声は騒めきへと変わる

やっぱりメガネを持ってこればよかったと思っただけの時だった

とある少女と俺は目が合う

一瞬で気づいた。懐かしい思い出が思い出されていく

ポニーテールの少女は俺の方を見て驚いたようだった

今は言いたいけど少し我慢だな

軽く手を振るとすると泣きそうな顔をするその少女の姿に俺は笑

う

胸が張り切れそうだった

久しぶりって言いたかった

そしてここから始まったのだ

幸せも地獄も経験することになる高校生活が

## 再会

入学してから一ヶ月がたち学校生活が始まった後

「ヤッホー。ハルいる？」

「ん。ってナツねえかよ」

ショートカットの少女が俺に飛び乗ってくる

この少女は速水夏樹。monaという名前でユニットを組んでいる相手であり、一個上の姉貴だ

「どうしたの。最近元気ないじゃん」

「ん。前に話しただろ？ほら再会できたって」

「ん？ってああ。小学生の頃約束した少女のこと？」

「ああ。んでずつと話す機会を探していたんだけど……」

「まだ話せてないんだ」

「……まあそうなる」

実際俺はレコーディングや週二回の歌ってみたの配信で忙しく、さらにファンサービスやイベントに参加など多くのことをこなしていたので帰宅後もそんな時間なかったのだ

「それに、あっちもあっちで忙しそうだからな。剣道で全国大会常連らしくて放課後は義妹集団に囲まれている日々だしな」

「……あゝってことは八重樫さん？」

「まあ流石にわかるか」

八重樫雫。俺と約束した少女の名前であり既に有名な少女の名前だ

剣道で負けなし、実家が剣道場で師範をしていることからだしな

「…八重樫さんのファンクラブもいるからね」

「ナツねえのファンクラブほどではないけどな」

「それを言うならハルほどではないと思うけど」

「俺は基本的に歌手とか歌い手だからだろ。天之河の人気は素であれほどだしな」

実際俺は有名人だ。テレビにでることがあれば、雑誌の取材やドラマにだってでることがある



歌い手としても人気であり、動画を出したら100万再生は堅いのだ

「そうかな？私としては歌ってる時のハルはカッコいいと思うけど？」

「……ん？」

「だって歌っている時のハルって後ろから見ると物凄く不安になるんだよ？私なんかとユニット組んでよかったのかなって思っているくらいに」

「……ナツねえと組まなかったなここまで来てないだろ」

俺とナツは学生ということを活かし恋愛ソングをよく歌っている

俺は歌には自身があるが舞台パフォーマンスではナツねえには叶わない

「もつと自信持てよ。俺みたいにヘタレじゃないんだから」

「なんでそこで自虐を挟むかな？」

苦笑するナツねえに俺は時間を見る

「ナツねえ。そろそろ戻らないとまずいんじゃない？」

「えっ？ってあつ！ごめん。それじゃあ」

「ああ」

と急いで教室に戻っていくナツねえに俺を見送った後俺は机に伏せる

…バカ。そんな簡単にかっこいいとか言うなよ

そう呟くと顔に熱がこもる

未だに憧れている姉貴に褒められることに慣れてはいなかった

「ん」

「あら。起きたかしら？有名人さん」

起きると既に長くなりつつある日も暮れかけているころ

俺がぼんやり目を開けるとそこには夕暮れに一人の影が見える

「…シズちゃん？」

「……やっぱり。ハルくんなのよね？」

俺は寝ぼけ眼をこする。俺は軽く頷く

「覚えてたんだな」

「ええ。ハルくんも」

すると久しぶりに顔を見合わせると俺たちは軽く笑ってしまう

「ナシナシ。堅苦しいのは似合わんだろ」

「ええ。でも大きくなったわね」

「あの時シズちゃんより小さかったもんな。俺中学で40cm近く伸びてるし」

実際小学生までは小柄だったが、中学生で俺は急激に伸びた

小学生は一番前が当たり前前だったのに今では184cmもあるのだ

「てかシズちゃんも綺麗になったじゃん」

「そ、そうかしら」

「だって前剣道があるから髪伸ばさないと俺に言ってたのに」

「……そういうえば、そうだったわね」

「絶対に似合うって言ってたのに」

少しだけむくれてしまう。するとそこから思い出話に移行する

小学生一年の思い出から始まりその後お互いに何があったのかを話していく

懐かしい話からデビューになったきつかけ、いろいろな話が自然と出てくるのだ

「……あれ？誰かいるの？もう閉門時間よ」

「ありや？」

「あら」

とその言葉はかき消される

担任の愛ちゃんこと畑山愛子先生だ

「えっとそれじゃあ帰るか」

「ええ」

「お前って確か一駅離れていたよな？送ってくぞ」

「えっ?」

「女子を一人で帰らせるわけないだろ？もう暗くなってきたるしな」

「いいわよ別に。あなた配信もあるでしょ?」

「今日は喉を休めるために休養日なんだよ……それにお前な少しは危機感持て。いいから送ってく」

「ちよ、ちよつと」

俺はため息を吐く。キョトンとしてるが別に関係ない

危機感も足りないし何よりももう少し話したいんだよ

そんな子供っぽいことを思ってるってばれたくない

「迷惑か？」

「い、いえ。そんなことないけど……」

「なら帰ろう」

鼻歌混じりで俺は手を引く

結局この後シズちゃんの家でご飯をご馳走になり、結局帰った時間が補導ギリギリの時間になりナツねえに怒られたのはまた別の話